
ビューティフル・ワールド

黒木 綾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ビューティフル・ワールド

【Nコード】

N3058C

【作者名】

黒木 綾

【あらすじ】

もう誰も忘れてしまった昔。人間に恋した死神が、人間になりた
いと願った哀れな話し。

第一話 見上げれば死神

昔、死神の仕事は、命が尽きた人間の魂を、この世で迷うことなくあの世まで導くことだった。

だから、誰も死神を恐れることはなく、むしろ感謝していた。

でも、別れのときにしか姿を見せなかったので、人は無意識に彼に、死別の一切の悲しみを重ねて見ていた。

だから死神はある時、友人の天使に呟くように寂しげに言った。

「みんな俺を見ると泣く。」

それはとてもつらい事だったけれど、天使は「だって、あなたは死神だから」と切なそうに言った。

気配がする。肉体から魂が離れ、ふわりと浮遊する感覚。

今日もそれを感じて、行かなければ迎えなければと腰を上げる。

人は自分の行いを感謝するけれど、ありがとうとは言わない。出来れば連れて行かないでと懇願される。

それはどうしても出来ない、何度逃げるように導いたか知れない。

途中、たまらなくなつて神様に聞いたことがあった。

「どうして人は死ぬんだ。」死神の突拍子も無い質問に、神様は優しく答えた。

「死ななければお前はいらないよ?」

「なら創らなければよかったのに。俺なんて。」

「世界に生まれたら終わりが来るから、だからね、お前が必要だったんだよ。」

終わりがなければ誰も、きっとあんな世界に生まれるとは思わなかったはずだと。

ただどあんなに泣かれて悲しまれるのなら、こんなにつらい仕事はない。

でも、誰かがやらなければならないなら、仕方が無いことだと死神は思った。

死神が死神を辞めたら・・・後は何にも残らないけれどと苦笑しながら。

向かった場所は、丘のふもとの小さな家。

父親と娘のたった二人暮らし。でもきつと幸せな暮らし。

それなのにもうすぐ、過去の幸せ。

「お父様・・・お願い、わたしを置いて逝かないで・・・」

娘は手を握り締め、病床に伏せる父親を懸命に看病していた。

「ソフィア、すまないな・・・お前を看病のために家に閉じ込めていた・・・」

「だから、ね？早く元気になって一緒に出かけましょう？もうすぐ丘の蓮華が綺麗に咲くわ」

「そう、だな・・・またお前の作ったお弁当を持って・・・」

そこで一緒に食べようと父親はいつものように優しく笑いかけて、やわらかいソフィアのその髪を撫でた。

でもその手が弱くなり、力なく、滑り落ちる。

「お父様！」パタリと落ちた手を拾って叫んだ。涙がどうしようもなく溢れて落ちる。

いつも見る光景だと思った。死神はそれを部屋のすみでぼんやり眺めていた。

そして仕方なく声をかけ、迎えに来たと知らせた。

この娘は何と言っだろう。何と言って自分に悲しさを訴えるだろう。

「・・・誰？」

「死神だ。お前の父親を迎えに来た。」

「死神・・・？」

そう言ってきたきよろと辺りを見回す娘に死神は首をかしげた。

こちらを向いても、目が合っても、一向に自分の姿を瞳に映さない。

「・・・あんだ・・・もしかして・・・目が。」

娘がゆっくり頷いた。

娘は生まれてから一度も、光を見たことが無かったのだった。

u
u
<u

第二話 命、まるで灯火

世界の何が見えなくても

死神の腰に下げられていた小さなランタンに火がともった。
魂の灯火。これを神様のもとへかえすのが仕事。

「お父様？そこにいるの？」

驚いたことに娘はガラスの中、揺らめく炎を感じてすぐにそれが父だと気づいた。

「分かるのか。」

「ええ、やわらかい光、間違いない……」と安堵したように微笑んだ。

「あまり長くはいられない。この火が消える前に連れて行く」泣かれても、縋られても、それが自分の仕事だからと。

割り切ってはいるものの、そうされるのは彼にとって苦痛だった。

だから今回も何と言われるのだろうと身構えたら、娘は素直にうなずいて、涙で濡れる瞳をそっとぬぐった。

「……いいのか？」このまま連れて行っても、と死神は思わず聞き返した。

「はい……悲しいけれど、受け入れます。」

言われた瞬間死神は動けなかった。娘の言葉の意味が分からなかったから。

受け入れる？愛する人の死を？この耐え難い悲しみを？

何よりも、俺を。

思わずふいに手を差し伸べようとした瞬間、部屋の扉が勢いよく開き青年が飛び込んできた。

「ソフィア！親父さんが・・・」

「アラン・・・？お父様が・・・」

すぐに察した彼は、我慢していたのか声を上げながら泣き崩れるソフィアの体を支えた。

「大丈夫、僕がいるから・・・大丈夫・・・」

「う・・・お父様・・・お父様あー・・・！」

「なんだ、やっぱりやせ我慢か・・・」屋根の上で死神はつぶやいた。
悲しいならそう言えばいいのに、されたくないなら嫌がればいいのに。

なのに

「どうして・・・あんなこと言っただ・・・」

両手を月にかざした。何をしようとした、俺は。

あの時、死神は抱きしめようとした。

初めて、人を。

つづく

第三話 歌

それでも娘は笑っていた。

愛する人を失っても、太陽のような笑顔を絶やさなかった。

それが何より死神にとって救いだった。

でも死神は知っている。娘が毎晩一人ぼっちで窓際に座り、泣きながら歌を歌っていることを。

時折寂しいと口からこぼしながら。

その歌は優しくて悲しい。とても。死神はその歌が好きだった。

「誰？」

屋根の上に座って歌を聴いていた死神に、ふいに娘が声をかけた。

「死神さんね？」

「どうして俺がわかるんだ？見えないのに。」

「さあ、どうしてかしら。でもわかるの。」

風もない静かな夜で、寂しかったからあなたの話を聞かせてと娘が

言った。

死神は少し黙って、それから自分の仕事のことを話した。
嫌な仕事。ツライ仕事。辞めたい仕事だと。

「あんたが始めてだった。俺を見て泣かなかったのは。」

「そんなに怖い姿しているの？」

「いや、・・・そうかもな。」

泣かれるのが嫌でたまらない。だから辞めたいんだと死神は弱音を吐く。

「ふふ、死神さんが死神さんを辞めたら、何になるのかしら？」

「さあ、なんでもいいさ。この仕事を辞められるなら。」

夜が更け、星たちの輝きが一層深まる頃、じゃあおやすみと死神は飛び去った。

眠る街を風のように駆け抜けながら思っていた。

何になる？何になりたい？死神を終えて何になりたい？

そして死神は考えてしまった。そして思ってしまった。いけないことを。

「・・・人間に、なりたい。」

そしたら、抱きしめてもいいような、気がした。

う
う
く

第四話 陰る太陽と満ちた月

「もうやめなさいよ、あの子の所へ行くのは。」

あれから何度も娘の元へ足を運び、段々と仕事をやらなくなっていた死神に、見かねた天使が警告した。
でも死神は余計なお世話だと聞かない。

「・・・うるさい。お前には関係ないだろ。」

「自分の仕事を投げ出して、神様に叱られますよ。」

どうしてあの娘の所へ仕事をおろそかにしてまで行くのだろうか
天使は不思議でたまらなかった。
しばらく考えて、思いついた。

「・・・好きなんですか？あの子のこと。」

もう一度死神は関係ないだろと言って、また人間の世界に下りて行った。

返事は聞けなかったけれどきつとそうなんだと天使は思った。

「なんてことを。傷つくのはあなたなのに。」

天使はもしも死神が死神をやめたら、もうそばにいられないと思う

た。

寂しいのは嫌だったから、娘と死神を引き離すことにした。少しだけ乱暴で酷い方法で。

天使は死神のことが少し、好きだった。

今日は歌が聞こえない。

いつもそよ風のように流れてくる歌が聞こえない。

気になった死神が窓から部屋を覗いた。

そして目に映るものが死神を心から打ちのめした。

娘と、いつかのアランという青年が口付けを交わしていた。

いつも紡がれる歌声は、なるほどその中に吸い込まれていたのだった。

死神がいることは知らない二人が誓いをたてる。一緒にいよう、ずっと一緒に。

「結婚しよう。」

「はい。」

二人は幸せに結ばれた。誰にも祝福され。すぐに式は挙げられ、告げる鐘の音は遠くまで響く。

鳥は歌い花は咲き誇り、太陽はやわらかく照らして、人々は拍手とおめでとつで迎え。

世界が色づき輝いて見えた。間違いなく二人は幸福だった。

教会の屋根からそれを見下ろして死神は絶望する。

歌は止み世界は黒白。天は重くのし掛かり人々の声は嘲笑うようにしか聞こえない。

「だから言つたでしょ。やめなさいって。」天使の仕業だった。二人を結んだのは天使の思し召し。

ゆらりと力なく振り返りながら、死神は天使に恨みの言葉を吐き捨てた。

「お前の仕業か・・・どうしてこんな・・・」

「あなたのためです。」

「黙れ！この悪魔が！」死神は天使にあるだけの言葉で罵った。

「消えろ！」

この世界も

「消えろ！」

全て

「消えろ！！」

目の前から

「消えろ！！！！」

この胸を引き裂くような鋭い痛みで何も分からない。

ひと時の幸せは割れて粉々になったガラス。
その破片で貫かれた心が血を流し悲鳴を上げた。

「痛い」

力なく地面に膝を付く。

「痛い・・・」

死神は気づいた。

そうか、これが人間が嫌う、失う痛みかと

それっきり、死神は仕事をやらなくなった。
さまよう魂たちが世界を埋め尽くしてゆく。

困った神様は死神にどうすれば仕事をするか尋ねた。
うつむいたまま死神は言った。星にさえ秘密だった、いつか願った
たった一つの願い事。

人間になりたいと。

「では、1千万魂を導きなさい。そうすれば、人間にしてあげましょ
う。」

死神は急いで仕事をした。

早く会いたかったから。もう一度会いたかった。

でも死神は人間が大嫌いになっていた。娘を奪ったのは人間だったから。

急いで、急いで仕事をやった。

あまりに急ぎすぎたから、してはいけないことをしてしまった。

まだ生きている人の体から、命を引き剥がした。

つづく

第五話 愛のための略奪、まるで罪のような

人々が恐怖で叫ぶ声がする。

「死神が来る！」

「命を奪いに我々の枕元へ！」

「死神が来る！」

「二度と目覚めの無い悪夢を届けに！」

「死神が来る！」

「耳を澄ませば家の扉を叩く音が！」

ひとり、ふたり、三人四人五人・・・

人がいなくなっていく。誰も死に逆らえず、耳元で囁かれたが最後。

世界が寂しくなってゆく。静かに終わってゆく。

やがて星を星と呼ぶ者がいなくなり、鳥を鳥と呼ぶ者がいなくなる。世界は無名になっていき、誰も何もわからなくなる。

「死神の欲しいものはただひとつ！」

あの娘だとみな気づいた。
早く生贄に捧げなければと町の人は武器をとって娘の家を取り囲んだ。

「私さえ行けば」

「駄目だ！君を失いたくはない！」

刹那、青年は娘を庇ってたった一発の銃弾で命を落とした。

「・・・アラン・・・？」

冷たい体を抱き寄せても、空っぽになった体ただの空蝉。
それは、もう娘の好きだった、愛した人じゃなくなった。

そう、またいなくなるの。また私を置いて、この暗い世界に閉じ込めるの・・・

歌が聞こえる誰かいつか歌った歌が

（天使）

♪ねえあの姿が見えるかい

愛しいもの失い絶望する姿が

君の目には何が見える

世界は何色に見える

でもね何も見えなくても　ぬくもり一つあればいいと

世界はいつも美しくて残酷で　醜くて優しいね

ねえ死神　見てごらん　あの子がほら　泣いているよ・・・

つづく

第六話 数えましょう命

「九百九十九万、九千九百九十一・・・」

あと何人・・・

「九百九十九万、九千九百九十二・・・」

あと少し・・・

奪って、奪って奪い続けた。

もう少し、もう少しで人間になれる。もう少しで会える。

悲鳴は徐々に少なくなつて、すすり泣く声も弱くなる。

気がつけば世界に人がいなくなつていった。

「九百九十九万、九千九百九十九・・・」

あとひとり。でも、誰もいない。

世界中駆け回って、飛び回って探したけれど人間がいない。

めぐり巡り着いたのははじまりの場所だった。死神の恋がはじまった場所。

丘の上で人影が見えた。

娘だった。

娘は丘の上のふたつの墓標の前にいた。

娘は泣いていた。あれからずっと、ずっと独りで悲しみに打ちひしがれていた。

世界には、娘がいなかった。

その小さな背中を見て、死神がやっと気づいた。
自分の犯した罪に。

やがて凍りつき砕けた心に昔の優しさが戻ってきた。
同時にそれは死神をこの上なく打ちのめした。

なんてことを。

でも死神を責める者は誰もいない。自分が消したから。

自分の罪に気づいた死神は、
手を差し伸べることも、まして奪うことも出来ずに立ちすくんでい
ると天使がやってきた。

「神様がお呼びです・・・」

死神は素直に、天使の導きに従った。

「あなたが悪いんですよ・・・あなたが・・・」死神が黙って頷く。
堪えきれずに天使が涙を流した。

「あなたのせいで私は・・・嫌な仕事をしなくてはならなくなった・
・・」

死神が頷く。途中振り返ろうとしたけれど、もう泣いている姿は見たくなくてやめた。

そして大人しく天使の後を追った。

神様の罰を受けるために

つづく

第七話 美しい世界

「罪を犯したら、罰を受けることは知っているね？」

神様は悲しそうに死神に問いかけた。

死神は足元を見つめたまま頷く。

「その前に、どうかひとつ願いを聞いてくれませんか。」

「人間になりたいのだったね？」

また死神は頷いた。でもそれとは別の願いだと言った。

「どうか、あの娘の愛する人を死者の国から返してください。」

「それがお前の願いだね。でもそれには代わりの命が必要だよ。」

もう世界には誰もいない。

でも死神はその心配はないと言った。

「この、俺の命ひとつ代わりに、どうか」

どうかどうか、娘が泣き止むのなら、もうこの命なんていらなかった。

隣にいるのは自分じゃなくても構わなかった。

終わりの扉へ向かう途中、天使が別れを告げるために走り寄ってきた。

「・・・死神さん・・・私は・・・あなたが・・・」

死神は少しだけ笑って、天使を抱きしめた。

「愛されるのも難しい。多分、愛することと同じように」

言葉は見つからなくて天使はその場に泣き崩れた。
さようならなんて言えない、悲しすぎて。

だから人も同じように、いつが最期の時か分からないのだろうか。

♪ 誰の声も聞こえない

世界は静寂に満ち溢れた

誰も私の名前を呼ばない

だから私、私の名前を忘れそうよ

私は悲しくて涙が溢れる　でも決して癒されない

あなたが、もういないから

その時だった

「ソフィア！」

遠くで呼ぶ声がある。

振り返れば

「アラン・・・？アラン！」もう二度と戻らないような泣き顔から
笑顔が咲いた。

抱きしめたのは確かな温もり。

もう離さないと、強く二人抱き合った。

季節は巡り丘の蓮華は咲いては散りゆき、風は吹き抜け鳥たちはさえずる。

太陽は何度も大地を照らし、月は静かに輝きながら夜を横切った。

そしてまたやがて世界に人が満ち溢れても、誰も死神の姿を見た者

はいなかった。

その後死神がどうなったのか誰も知らない。

♪ 今、笑う声がした

あの人の笑う声がした

幸せの歌声がする

聞こえるよ きつとふたり 幸せを分かち合っていると

そうしたならきつと、目に映る全てのものがあなたにとって

美しい、世界

E
N
D

第七話 美しい世界（後書き）

あの日生まれた愛する犯罪者とそれを愛してくれた愛しい人へ
出会ってくれて、見つけてくれて、そして何より愛してくれて
ただ「ありがとう」を込めて

作者より

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3058c/>

ビューティフル・ワールド

2010年10月10日01時54分発行